



鈴木寿子著

共生社会の構築を支える 日本語教師養成の実践研究

早稲田大学出版部、2013年発行、237p

ISBN : 978-4-657-13517-9

孫 雪嬌

本書は、鈴木寿子氏（以下、「著者」）が平成 22 年 9 月にお茶の水女子大学に提出した博士学位論文『持続可能性教育としての共生日本語教育実習の可能性—言語生態学的内省モデルの提案』に加筆し、刊行されたものである。本書は日本の共生社会の構築を支える日本語教師の養成のあり方を探求することを目的に、新たな教師養成モデルを提案した上で、四つの研究を重層的に行い、実習生の学びの仕組みと意識変容の様相を明らかにした。

本書評では、まず各章の内容を概観していく。その上で、本書の意義と今後の展望について所感を述べ、最後にまとめを行う。

1. 本書の概要

1.1 はじめに

「はじめに」では、研究の時代的・社会的背景、本書のねらい・構成、著者の立場、及び想定する読者について説明している。「著者は、日本語教師の職の安定を希望するのはもちろんであるが、同時に、経済性一辺倒のモノの見方には疑問を投げかけたい。今、世界がどうなっており、われわれはどう生きていくのかを、日本語教育学という一つの窓から、ことばを使って考えていきたいのである。」(p.2) この一言に著者の問題意識が凝縮されている。このような問題意識から出発した本書は、教師の内省に着目し、「共生に向けての内省という新たな見方を読者に提示する」ことをねらいとしている (p.3)。

1.2 第1章～第4章

本書の第1章から第4章は研究の理論篇に当たる。

第1章では、日本社会における外国人住民の増加と彼らに対する日本語教育の現状を概観している。著者は、日本語教師が日本人住民と外国人住民との「共生」を住民主導で推進していくためのキーパーソンになりうる、と考えている。このような日本語教師を目指した養成のあり方を、本書ではお茶の水女子大学大学院の日本語教育実習の取り組み「多言語・多文化共生日本語教育実習」（以下、「共生日本語教育実習」）を題材に考察する。こ

の共生日本語教育と従来の日本語教育との違いについては、第2章で説明している。従来の日本語教育では日本語非母語話者の日本語力の底上げを目的としているのに対し、共生日本語教育では母語話者も非母語話者も同等な学び手と見なされる。第3章では、これまでの日本語教育における教師養成プログラムを三つの型に分け、比較している。本書で著者は、共生日本語教育をよりよく捉えるために従来の教師養成モデルを改善し (p.46、図3-2)、言語生態学 (岡崎 2009 等) から得た知見を重ね合わせ、本研究の基盤となる「言語生態学的内省モデル」(図1) という新しいモデルを策定した。第4章では、言語生態学的観点から共生日本語教育実習に関するこれまでの研究を捉え直している。

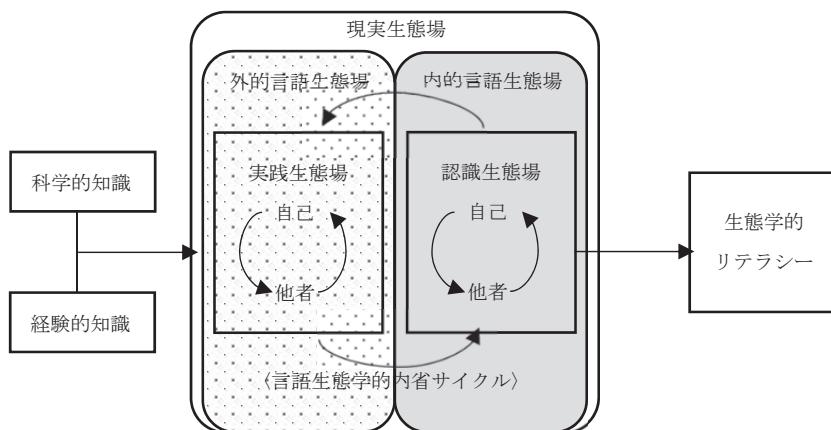


図1 言語生態学的内省モデル (p.53、図3-3)

1.3 第5章～第9章

第5章では、フィールドとなる共生日本語教育実習について説明し、研究目的と研究課題を提示している。本研究の第1の目的は、言語生態学的内省モデルを用い、共生日本語教育実習生の学びの様相を明らかにすることである。第2の目的は、生態学的リテラシーを育成するものとしての共生日本語教育実習の意義を明らかにすることである。研究目的を達成するために、本書では2部構成で、四つの研究課題を挙げている (p.70)。

第一部：自己と他者の存在する言語生態学的内省サイクル

研究1：実習生の〈認識生態場〉¹の自己内対話はどのように展開するか。

研究2：共生日本語教育実習はどのような〈現実生態場〉に位置づいているか。

第二部：獲得目標としての生態学的リテラシー

研究3：実習を通じて実習生はどのように生態学的リテラシーを形作るか。

研究4：実習後に実習生はどのように生態学的リテラシーを持続させているか。

以降の第6章から第9章は研究1～4にそれぞれ対応している。

第6章では、「実習生が内省を自問自答のような形で、内在化した他者を相手に対話をめぐらせる場に当たる」(p.53)〈認識生態場〉において、実習生の内省がどのように展開しているかを考察している。著者を含む32名の実習生が記述した「内省レポート」に対し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を援用し分析を行った。実

習生は人や文献から得た知識、実習で出会った他者などと自己内対話を繰り返す中で自己実現に向かい、懐疑的だった共生社会実現への態度を改め、実習の意義を見出していった。このような〈認識生態場〉の展開が明らかになった。こうした内省を深めるには、特に実習生仲間との協働関係が重要であることが示唆された (p.112、図 6-2)。

第7章では、現実世界に対応する〈現実生態場〉を実習生がどのように認識しているかを、内省レポートの中で「世界のコト・モノ・人」と「自己との関わり」が現れている記述に着目し分析している。実習生は、教室の中の出来事や話題を、日本や他国で起こっている問題および自己の言語文化的背景と結びつけながら考え、世界を認識する構造を拡大し深化させている。このような学びの様相が浮き彫りになった。従って、共生日本語教育実習が位置づく〈現実生態場〉が入れ子型になっていることも明らかになった (p.134、図 7-4)。

本書では、著者は教師養成の目標を「生態学的リテラシー」に据えた。「生態学的リテラシー」とは「想像力を持って自己の視座の中に他者の視座も保持し、自己の生き方と主体的関連の下に、自己を起点として視野を拡大しつつ捉えていく力」であると定義されている (p.50)。実習生がどのような生態学的リテラシーを獲得するかを明らかにするために、第8章では一人の中国語母語話者実習生に焦点を当て、メタファー生成課題などの複数のデータを用い、実習生の意識変容の様相を分析している。実習生は自らを「正しい日本語」の規範から逸脱した者と捉えていた。しかし実習では十分な日本語運用力をもっていない外国人小学生の活躍を目の当たりにしたことで、「正しい日本語」は絶対的なものではないという認識に至った。この実習生は実習を経て、日本語非母語話者である自己を起点として、参加者と共に教室を作り上げる教師のアイデンティティを獲得し、生態学的リテラシーを形作ることができた。筆者は初めてこの事例を読んだ時に覚えた衝撃と感動が忘れられない。なぜなら、ほとんど日本語ができない小学生が教室で活躍する姿は自分には想像できなかったからである。筆者は自分の中で「日本語ができない限り日本語の活動に十分に参加できない」という準備主義的な固定観念が拭えていないことに気づかされた。

このように醸成された生態学的リテラシーは、実習生のその後の人生にどのような影響を与えていくのか。この課題を明らかにするために、第9章では研究3の実習生に対して、実習後3年を経てインタビューを行った。実習の場から離れ社会人になった実習生は、共生日本語教育で得た学びを人生の進行に合わせて反芻し、共生日本語教育の理解を絶えずに更新させている姿があった。実習生にとって共生日本語教育は、実習期間が終わった今もなお何度も立ち戻ることのできる学びの源泉として存在することが示唆された。

1.4 第10章

第10章は本書の総括として、第一部と第二部の研究結果をまとめ、研究の意義、限界および今後の課題について述べている。本研究の大きな意義は、言語生態学的内省モデルを打ち出し、先行研究では明らかになっていなかった、内省の展開の様相を顕在化したことである。また、著者は、教師に望まれる資質が客観的な指標を持って一般に通用するようなものであるというような「教師の能力」観を疑問視している (p.49)。生態学的リテラシーを教師養成の目標に据えたことにより、本書は教師の資質を考える際に教師と教師が

いる文脈との関係をより重視する視点の重要性を提起している。

研究の結果から、著者は日本語教育および日本社会に対して三つの提言を行った(pp.211-214)。中でも筆者が特に取り上げたいのは三つ目の提言である。著者は大学院で日本語教育を学んで日本語教育の職につかない人を「在野の共生日本語教師」として注目し、その存在の意義を研究の事例を通して主張している。「共生日本語教育を学び、母語の大切さを知るケイさん（筆者注：研究3と4の実習生）がいることにより、ケイさんの周りの人間、例えば会社の同僚にとっては、日本語教育、母語教育という存在が身近なものとなる」。(p.214) 日本語教育を専門として学んでいたが日本語教育の道に進まない人にとって、「在野の共生日本語教師」の視点は、日本語教育を学んできた経験を積極的に意味づけ、日本語教育の道を選んでいない今の自分が社会に対してできるアクションを考える上で、未来志向的な視点だと言える。また従来 of 日本語教育の教師養成の使命という、より多くの教師や関連分野の専門家を社会に送り出すことを容易に思い浮かべられるだろう。しかし実習生の背景も実習後の進路も多様化している現在、「教師養成を受けた実習生＝将来の日本語教育専門家」という想定が崩れつつあると言わざるをえない。その中で、本研究は日本語教育の新たな社会的な役割を探索する先駆的な研究と位置づけられよう。

2. 日本語教育における本書の意義及び今後の展望

日本語教育の分野における本書の意義について、第10章で述べた諸点の他に、筆者にとって特に興味深い点として、以下の三つを取り上げたい。

まず、本書の視座の高さと視野の広さが印象的である。本書は日本語教師の職業の不安定さを含めて、貧困や雇用危機などといった世界中に広がる不安定さを研究の大きな背景として認識している。この意味では、本書は日本語教育の分野の研究として特に貴重であるといえよう。「日本語教育の公共性」が議論されるようになってきている(例えば、川上 2016) 中、自分の実践・研究が置かれている現状に鑑み、誰のために、何のために実践・研究を行っているのかを明確にする本書のような研究が増えたら、日本語教育は社会との接点が多くなり、現状の改善に寄与する可能性も広がっていくに違いない。

次に、本書では研究の位置付けと研究姿勢が明確に記述されており、このことは特に研究者である読者にお勧めしたい理由の一つである。なぜ自分の研究を量的研究・質的研究と位置づけるのか、「当事者性」をどのように認識するのか、データをどのように捉えるのか、これらの研究の前提となる問いに対して、理論的に裏付けながら答えることを疎かにしてしまう研究も見受けられる。本書は理論的背景に立ち戻り、「言語化されたデータを研究にのみ奉仕するものと捉えず、自省主体の人間生態の保全に資するものと捉える」「言語生態学的質的研究」として研究を位置づけている(p.85)。研究者はどのような心構えで協力者に接しデータを収集し、研究とは誰に何に還元するものなのか、といった研究倫理に関しても、本書は読者に自らの研究姿勢を振り返る視点を提示している。

そして非母語話者実習生に焦点を当てた研究3は、筆者にとって最も興味を惹かれた部分である。筆者自身も日本国内で教育実習を経て、現在日本語学校で教えている非母語話者である。そして、非母語話者である自分が、常に「日本人と同じように日本語を正しく

教える」ことを求められることに、葛藤を感じている。研究3において協力者の葛藤と意識の変容が詳細に描かれているため、筆者はそれを自身の経験と重ね、強く共感を覚える。「正しい日本語」の規範をどのように乗り越えるかを考える際に、「非母語話者である自己を起点として世界を捉える」という著者の主張が一つの突破口になるのではないか。研究3は「正しい日本語」について再考するきっかけの一つとして、学習者にも教師にも広くご一読いただきたい。

このように本書は教師養成にとどまらず、日本語教育全体に大いに示唆を与えている。一方、筆者は以下の2点について疑問を感じた。一つは、「実践研究」に関する疑問である。本書ではタイトルとして「実践研究」を掲げているが、その定義と本研究を「実践研究」と位置づける理由に関する説明が欠けているように見受けられる。日本語教育において、実践研究の定義や研究領域としての位置付けに関するコンセンサスは未だ得られていないと指摘されている(市嶋ほか、2014)。著者が実践研究に対する自身の立場を明確に示すことにより、読者は、著者との間で「実践研究」に関し対話を行うことが可能になる。

もう一つは「共生日本語教育」に関する疑問である。本書では、「現在の日本語教育の現場では、日本語学校においても、地域においても、共生日本語教育を実践できる場は非常に限られている」(p.215)とされている。この記述から著者の「共生日本語教育」に関する考え方の揺れが見て取れる。もし「共生日本語教育」が「共生日本語教育実習」の枠組みそのものを指しているならば、確かに母語話者も巻き込むような実践ができる現場は多くはないだろう。一方で、上述の「在野の共生日本語教師」という主張に即して考えれば、「共生日本語教育」は共生を目指す実践者の意識・態度・マインドでもあるとも理解できる。例えば、非母語話者だけが教育の対象とされる現場であっても、学習者が「正しい日本語」と自分の関係を考えられるように、教師が授業を工夫する場合もあろう。「共生日本語教育的な意識・態度・マインドをもって実践しているならば、それはその実践者のその現場で行う「共生日本語教育」と言えるのではないか。このように捉えると、「共生日本語教育」が様々な現場で実践される可能性が広がっていくだろう。

3. おわりに

「世界はどうなっているか」「そこでどう生きていくか」「どのような人間関係を形づくっていくか」「私とは何か」(p.2)。著者は、自らの問題意識を読者にも投げかけ、共に答えを模索しようと誘いかけている。本書は、「在野の共生日本語教師」を含む多くの教師が日々の実践を振り返り、そしてこの多文化社会での自らの立ち位置を省察するための良きガイドとして、ぜひ読んでいただきたい一冊である。

注

- 1 本稿における〈 〉の使用は、当該書籍の表記と統一している。

参考文献

- 市嶋典子・牛窪隆太・村上まさみ・高橋聡 (2014) 「実践研究はどのように考えられてきたか—日本語教育における歴史的変遷」 細川英雄・三代純平 (編) 『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』 第1章、ココ出版、pp.23-48
- 岡崎敏雄 (2009) 『言語生態学と言語教育—人間の存在を支えるものとしての言語』 凡人社
- 川上郁雄 (2016) 「「公共日本語教育学」構築の意味—実践の学の視点から」 『早稲田日本語教育学』 20、pp.33-47

(そん せつきょう 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程)